

I-161 曲線げた橋の衝撃係数に関する研究

大阪大学 正員 小松 定夫
 大阪市立大学 “ 中井 博
 ” “ 事 口 寿男

1. まえがき

前回では、曲線げた橋上を自動車1台のみが走行する場合の動的応答を求め、衝撃係数ガスパン、曲率半径、固有振動数比などのパラメーターによってどのように変化するかを報告した。¹⁾ 今回は、スパンが長くなると、けたに同時に載荷する自動車台数が多くなり、スパン長の増大に伴なって衝撃係数が小さくなることに注目し、既設されたスパンスルーム～50mの曲線げた橋13橋を対象にして、動的解析を行ない、曲線げた橋のスパン長と衝撃係数との関係を求めたものである。²⁾

2. 解析方法

運動方程式の誘導は文献³⁾にゆずるが、2台の自動車が走行する際の運動方程式を無次元化して示すとつぎのようになる。

$$\left. \begin{aligned} \frac{\ddot{w}}{w_{st}} &= -\frac{d\phi}{\lambda} \left(\frac{\dot{w}}{w_{st}} - \hat{\gamma}_w \frac{\dot{\beta}}{\beta_{st}} \right) - \frac{\dot{\beta}_{st}^2}{\lambda^2} \left(\frac{w}{w_{st}} - \hat{\gamma}_w \frac{\beta}{\beta_{st}} \right) + \sum_{i=1}^n E_i \left(\frac{\dot{P}_{in}^2 w_{st}}{\lambda^2 w_{st}} + \frac{M_{in}}{M_0} \left(\frac{dw}{\lambda w_{st}} \frac{di}{dt} + \frac{P_{in}^2}{\lambda^2 w_{st}} \frac{di}{dt} \right) \right) \sin \pi(\tau - \phi_i) \\ \frac{\ddot{\beta}}{\beta_{st}} &= -\frac{d\phi}{\lambda} \left(\frac{\beta}{\beta_{st}} - \hat{\gamma}_\beta \frac{\dot{w}}{w_{st}} \right) - \frac{\dot{w}_{st}^2}{\lambda^2} \left(\frac{\beta}{\beta_{st}} + \hat{\gamma}_\beta \frac{w}{w_{st}} \right) + \sum_{i=1}^n E_i \left(\frac{\dot{P}_{in}^2 \beta_{st}}{\lambda^2 \beta_{st}} + \frac{M_{in}}{T_B} \left(\frac{dw}{\lambda w_{st}} \frac{di}{dt} + \frac{P_{in}^2}{\lambda^2 w_{st}} \frac{di}{dt} \right) \right) \sin \pi(\tau - \phi_i) \\ \frac{di}{w_{st}} &= \frac{\dot{\beta}_i}{w_{st}} - \left(\frac{w}{w_{st}} + \frac{y_p}{\mu} \right) \sin \pi(\tau - \phi_i) \end{aligned} \right\} \quad (1)$$

ここに、 w/w_{st} ；たわみ（無次元）、 β/β_{st} ；断面回転角（無次元）、 $\lambda = R_s/R_p \cdot \frac{v}{l}$ ；time factor
 $\tau = \lambda t$, $\phi = \frac{d}{dt} \tau$ を意味する。

また、 $R_s \rightarrow \infty$ にすれば、 $\hat{\alpha}, \hat{\gamma} = 0, \hat{\gamma}_w, \hat{\gamma}_\beta = 1.0$ となり上式の運動方程式は直線げたの動的解析にも適用しうる。

3. 計算結果および考察

代表的な曲線げた橋の断面諸量を表-1に示す。

表-1 曲線げた橋の断面諸量（代表例）

スパン l (m)	曲率半径 R_s (m)	中量 B (mm)	断面 形状	断面体積 引当質量 ($\times 10^{-3}$) $\times 10^3 (\text{cm}^3)$	断面積 $\times 10^6 (\text{cm}^2)$	断面1次 モーメント $\times 10^6 (\text{cm}^4)$	断面2次 モーメント $\times 10^8 (\text{cm}^6)$	横断面 剛性 (無次元)	
19.5	60.0	7.9	□	2.3015	3.406	0.7247	7.067	2.1416	0.8909
25.0	40.7	7.8	□□	2.4265	3.098	0.7479	8.436	2.0503	0.3770
30.0	40.8	7.8	□□	2.1929	3.428	1.0772	8.672	2.0610	0.3630
32.0	50.0	9.2	□	0.8010	6.330	1.4707	15.430	1.1470	0.6860
38.5	98.7	12.9	□□	2.2733	5.434	2.7632	44.305	8.8386	0.3487
45.0	80.5	12.7	□□	2.2330	5.581	2.8602	41.815	8.9180	0.3284
50.0	84.9	13.1	□□	2.2810	5.617	3.0135	50.162	9.3481	0.3221

図-1 走行状態

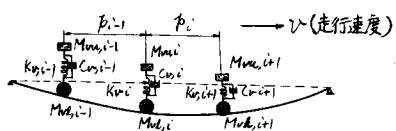


図-2 曲線げた橋の断面

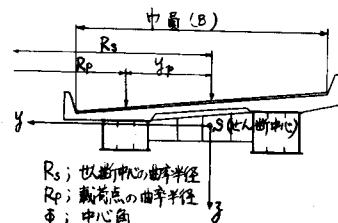


表-1中の換算ねじり剛性と曲げ剛性との比Aは、周知のとおり次式で与えられ、曲線げた橋の動的性状を把握するのに重要なパラメーターである。

$$A = (E_s C_w \cdot (\pi/l)^2 + G_s J) / E_s I_y \quad (2)$$

一方、自動車のパラメーターはつきのようになる。

$$\left. \begin{array}{l} \text{自動車重量} = 20 \text{ton}, \text{車頭間隔}(p) = 10m, f_v/f_b = 1.0, \text{速度}(v) = 40 \text{km/h} \\ \text{対数減衰率} = 0.2, \text{鉛直加速度} = 0.3g, \text{自動車台数}(n) = l/p+1 \end{array} \right\} \quad (3)$$

曲線げた橋の固有振動周期とスパンとの関係を図-3にプロットして示すが、曲線げたでは曲げとねじりが連成するため、固有振動周期は直線げたよりも一般に大きく、大体、次式の関係を満足するように思われる。

$$T = \frac{l}{70} - 0.1 \quad 20 < l^m < 50 \quad (4)$$

さて、表-1に示した実橋の断面常数と式(3)を用いて、曲線げた橋の衝撃係数を求め、スパンとの関係をプロットすれば図-4が得られる。この図より、直線げた橋と同様にスパンの増大に伴ない衝撃係数は小さくなることがわかる。また、曲線げた橋では一般に直線げた橋よりも衝撃係数は小さい。これは、曲線げた橋では静的たわみが当量な直線げた橋に比して約20%大きいが、動的変位は直線げたも曲線げた橋も余り差異はない。したがって、衝撃係数を動的たわみと静的たわみの比として定義すれば、曲線げた橋のほうが小さい値をとるものと思われる。また、曲線げた橋では、内げた走行時の内げたの衝撃係数と外げた走行時の外げたの衝撃係数は、多少差異がある。これを定量的に把握するのは繁雑であるが、いま、たとえば、図-4の各点を包絡する曲線によって、曲線げた橋の衝撃係数を求めると、つきのようになる。

$$i = \left(\frac{R_s}{R_p}\right)^2 \times 0.5 \times \frac{10}{l} \quad (5)$$

ここで、 $l = R_s$ を曲線げた橋のスパン、単位m、また、

$(R_s/R_p)^2$ は載荷位置による補正係数であり、中央走行する際の衝撃係数 $0.5 \times 10/l$ にこの係数を乗せればよい。

4. あとがき

発表当日、工形断面についての衝撃係数、および曲率半径、換算ねじり剛性と曲げ剛性との比などのパラメーターの変化による考察を行なう予定である。

参考文献

- 1) 小松定夫、中井博、事口寿男
- 2) 山田義一、小坂義雄
- 3) 小松定夫、中井博

土木学会第24回年次学術講演会概要集 I-82

活荷重に対する道路橋の動的応答 土木学会論文集 145号

曲線げた橋の動的応答に関する基礎的研究 土木学会論文報告集 174号

